

平成 24 年度

第 27 回 **熊本市 P T A 研究大会**
報告書

生きる力「**命**」未来へ

～今、私たちにできること～

平成 24 年 11 月 10 日（土）

熊本保健科学大学

熊本市 P T A 協議会

平成24年度熊本市PTA研究大会

大会テーマ

《 生きる力「命」未来へ ～今、私たちにできること～ 》

一昨年の東日本大震災に続き、本年は九州北部豪雨で多くの尊い命が失われました。また、自然災害以外でも、いじめや通学途中の事故、虐待など、命について考えさせられることが多いように思われます。

そのような中、命の重さ・尊さを改めて考える必要があるのではないのでしょうか。子どもたちの命を守り、生きる力を育み、未来へつないでいくためには、家庭、学校、地域が一体となって取り組んでいかなければなりません。

そこで、「今、私たちにできること」を考え、この大会で「命」について学び合おうではありませんか。『子どもたちの未来のために』・・・

- 1 期 日 平成24年11月10日(土)
- 2 場 所 熊本保健科学大学 全 体 会：アリーナ
第1分科会：アリーナ
第2分科会：3110 講義室
第3分科会：50周年記念館
- 3 参加者 熊本市PTA会員(教職員・保護者) 746名
- 4 来 賓 熊本市教育長 廣塚昌子 様(祝辞)
市教委教育政策課長 井上正文 様(代理：同教育審議員 三島健一 様)
市教委指導課長 濱平清志 様(代理：同教育審議員 馬場正文 様)
熊本市小学校長会長 田中順子 様
熊本市中学校長会長 亀井弘治 様(代理：同副会長 古閑尚重 様)
- 5 日 程
・ 受 付 12:30～
・ 保健科学大より 12:40～13:00
(1) 開会行事 13:00～13:30
① 国歌斉唱
② 主催者あいさつ 熊本市PTA協議会会長 上田芳裕
③ 来賓祝辞 熊本市教育長 廣塚昌子 様
(2) 全体講演 13:30～14:30
講師 岡崎光洋 氏
くまもと心理カウンセリングセンター代表・臨床心理士
演題 「生きる力「命」未来へ ～今、私たちにできること～」
(3) 保健科学大学紹介 14:30～14:40
———— 会場移動・休憩 14:40～14:50 ————
(4) 分科会(分科会ごとに終了解散) 14:50～16:20
① 命と仕事～命をいただく～ 熊本市食肉センター 坂本義喜 氏
② 生物多様性～命の繋がり～ 環境省九州地方環境事務所 所長 塚本瑞天 氏
③ 身を守るために～現状と予防対策～ 県警 生活安全企画課 課長補佐 今村義彦 氏

【基調講演】

演題：生きる力「命」未来へ～今、私たちにできること～

講師：岡崎光洋氏（くまもと心理カウンセリングセンター代表）



熊本高校、早稲田大学第一文学部卒。立教大学大学院修士課程修了後、上天草総合病院に勤務。平成6年、臨床心理士資格取得。現在、熊本大学医学部非常勤講師、スクールカウンセラー、くまもと心理カウンセリングセンター代表。専門は臨床心理学(心理療法、児童心理、医療心理、家族心理)。医療と教育の現場で臨床業務の傍ら、現代における望ましい子育て等について講演活動を幅広くなされている。

【講演内容】

1時間という短い時間で、具体的な事例を交えながら講演をいただきました。

講演内容の概要は以下のとおりです。

『便利は子どもを育てない』

戦後の日本は、生活を便利にあるいはニーズに合わせるということに一生懸命になり、発展を遂げ、表面上は便利になっていることが多い。しかし、親の世代にとって便利なのは、今の子どもにとっては普通のこと。それぐらい基準が変わっている。ただ、人間関係は思い通りにならないことが歴然とあり、ちょっと嫌なことがあると、①キレて「キ～」ってなる、②どんと落ち込んでどうせ私は、となる、③面倒くさい、意味が無い、という3つに分類される。命のことで言うと、表面上生きやすくなっているが、命が軽視され、死にやすく殺しやすくなっている感じがある。生きるのはそんな簡単じゃないけど、子どもにはそう伝えてしまっている感じである。つまり、便利は子どもを育てないのである。

『人間関係も練習が必要』

スポーツや楽器の演奏、これらの2つは練習をして上手になるもの。最初下手は当たり前、練習して上手になればよい。ところが、人間関係や人との関わりは、練習して徐々にできますか。どうも人との関わり合いは、もう合わないならアウト、苦手ならもうダメ。白か黒か、100か0かという感じとなっている。だんだん出来るようになればいいし、人間はそれを20年ぐらいかけられる生きもの。人間関係・友だち関係については、ゆっくり練習してなんとなくできるようになればよい。そのために学校はあり、それが最大の価値。ちょっとしたトラブルや対人関係の難しさを回避しようとし過ぎの方、一部の方はどうもその体験をさせないことが子どもを愛することだと思っている。



『生きる力を付与する事』

愛することというのは生きる力を付与すること。時には母性的に抱擁しなければいけない時があれば、こうい



うふうにやってごらんというように、父性的に押し出さなきゃいけない時もある。生きる力というのは、本人が対人関係の中で本人が生きていく力を付与されること。そして、子どもを守るということは、本人が自分で自分を守る力を付与されること。

生きる力というテーマが言い出されたのが、7・8年前にいじめ自殺が社会問題になった時。学校で生きる力を付与するというふうに強く言われた。その時に生きる力について思った3つのこと。

1. 《耐 性》 困難に耐えてそれをやり過ごしたり、どうしたらよいか工夫したりする力。
2. 《共感性》 人と感情を共にする・わかり合うということ。
3. 《柔軟性》 柔らかさ。

心理的にはこの3つを付与すること。そういうことをゆっくり獲得できるのが学校。その価値は、①人間関係の練習としては大事なところ、失敗してよい場所。②嫌々行くところに意味がある。良い意味ジャングルの様な場所、③行事体験。これは家ではなかなか付与しづらい連帯感や達成感を付与できる。これらが学校のかけがえのない場所。

もちろん、あなたは生きているだけでいいよ、というメッセージは大事。とにかく生きているだけで親孝行、息をしているだけでよいという、根本的な肯定感も大事。

『いつも色々な人と生き合う感覚』

生きる力って、私たちは生き合うもの。子育ての目標として「いつも色々な人と生き合う感覚」を育ててほしい。

生きること、1人では生きていけない。100%自給自足の人はいない。生きているだけで生き合っている。しかし、日本語としては全然熟していないどころか、全く使われてない言葉をわざと使うのは、今殺し合わなくてもいい人たちが、殺し合っている面があるから。そのわかり易いのが家族、そして災害。何の落ち度もないのに旅立つことがある。

そして、『絆』という字は大切だということに別に異論はないが、字の源をたどると、馬や牛を繋ぎ止めておく紐のこと、さらには、人の自由や行動を奪うものと書いてある。昔の人の知恵はすごい、こちらも活かさなければならぬ。スムーズにいかないことも含めて人間関係。だから『絆』というのは、その意味でも大した言葉。「生き合う」はただ生きるじゃなくて、どこかで他者を意識してもらいたい。

『イ』『ル』『カ』『と』

これは、「いつも色々な人と生き合っているから」その先。

『イ』【嫌な人もいれば嫌な時もあるよ】

困難に遭うという事がおきる。人が否定したからシャッターを下ろしたくなる気持ちはわかる。でも、人は沢山いて相当違うと思っていた方がよい。嫌なことがあっても過剰にならず、嫌な時もあると思いたい。時間をかけてよいから、この人はダメではなく、この人のこういう面は嫌だなとか、この人のあの時のことは許さないというように、部分否定の癖をつけて欲しい。そういうことを子どもが学校で体験して気づかなければ、ゆっくり教えてほしい。時間はかかるもの。多様性と多面性。漢字にするとたった6文字だけど、それを自分の身につけて生きると、私たちはすごく生きやすくなる。

『ル』は【ルールはあるよ、最低限は】

色々な人たちと生き合うから【ルールはあるよ、最低限は】大まかに言うと挨拶・返事・後片付け・集合など。人と生き合うのに最低限のルールはある。

『力』は【感謝しようね、心の中で】

親が、直接感謝しなさいと言ってもよい反応はないと。試してもらいたいの、食べる時に、ほんの1秒「いただきます」とか「ごちそうさま」という時だけでよいから、“食べられるのが当たり前じゃなくて、食べられてありがたいね”っていうふうにまず大人の方から習慣にしたい。子どもにさせたいことは周りの大人が黙ってやり続ける。食べるということは、他の命を奪っている。日本は毎日、何万トンの残飯が出ている、一方では、ごみの中をあさらなければならない子どもたちもいる。だから、その「いただきます」「ごちそうさま」の瞬間だけでも、食べられることが当たり前じゃないということ意識させたい。まずは、大人から。



『と』【時には戦います】

適度にノーと言えるようになるということが成長とか成熟の証の1つ。

大人になるということの全てではないが、適切にノーと言えるようになる。戦闘モードではなく、「やっぱり嫌」とか、「したくない」とか、別の言い方の練習もしたらよい。

トラブルは子ども同士の関係のジ・エンドではなく、スタート。私たち自身が生き物なので関係も生き物。子ども同士の関係や気持ちは変わる。ずっと一緒ということはない。それをマイナスに考えるのではなく、余計に変わる可能性があるからお互いを成長させるチャンスと思ってもらいたい。

『こ』 『こ』 『た』 『こ』 『こ』 『た』

子育てで、これがキーワードになりませんかというのを纏めたもの。

【こ】「困難が子を育てる」ないし、「困難が心を育てる」

【こ】「後方支援」

多少トラブルがあった時、振り返ったら親がいる程度でよい。子どもの前にある障害を除いてやるのではなく、後ろにいて後方支援の支え方をする。

【た】「種を心にまくイメージで」

子どもに正論を言おうとすると、つい分量が多くなり長くなる。これは心理的満腹感と言うが、たくさん食べた後に、どんどん次も来るともうお腹一杯になる。

種をまくイメージは、大事なことは極力コンパクトにワンフレーズぐらいにまとめる。すぐ表情が変わるのを求めない。子どもが神秘的な顔になって、「はい、わかりました」「ごめんなさい」というのを求めるから長くなる。種を心にまくイメージで、時間が経って、根が張って、芽が出て・・・それ位の時間を与える。

【こ】「魂くらべ」

日本語的には本当は根という字。ここは手を出さない、口を出さない、あるいは待った方がよい、本人がちょっと困ってから助けてやった方がよいという意味。よかれということが先に出る方が最近多いので「魂くらべ」。お互い心を育て合っているというふう思うこと。

【こ】「こまめに対応しない」です。

本人が、次はどうしたらよいかを獲得しづらいため「こまめに対応しない」。

【た】「大木の様にいる」「大木に見えるようにいる」

子どもに対して、あまり揺れないでいる大木のように見せたい。色んなことがあっても、どんとしている。子どもが勝手に近づいたり離れたりしながら成長していくというようなイメ

ーじ。嫌なこともあるという前提で、そういうことが心を育てる。動いて何か体験してって感じで、それと心も一緒。そして生き合うというところから、人との関係の中で、困難が生じるかもしれないけど、ゆっくりゆっくり対応能力をつけ大人になってほしい。

困難こそがわが子を育てる。あるいは、そのことの体験が個性的になっていくということだと思うので、子どもの能力が開花するように色んな人と関係を形成できる子育てをしていただきたい。

【第1分科会】

講師：坂本 義喜 氏（熊本市食肉センター）

演題：「命と仕事～命をいただく～」

プロフィール（ご本人による紹介）

15歳で親の仕事だった解体業を手伝いの形で始めたが、1週間でやめる。親の勧めで大阪の小売りの板前の修業をし、熊本に帰り市内の大手小売店に就職。現在の奥さんと結婚。子どもが小学校にいるとき、板前から今の食肉加工業に移る。ある時、子どもの一言や、牛のミーちゃんとの出会い。その時ミーちゃんの涙を見て、それから動物たちの涙の意味を感じた。

その涙の意味をたくさん子どもたちに知ってほしいと思い、講演活動を始めた・・・。



【講演内容】

2年前、本荘小学校で初めてPTA（保護者）を対象とした講演をした。いつもは、子どもに話していたのですごく緊張した。

自分も、娘が中学生の時にPTA役員の体育委員長をやらされる。活動当初はすぐにでもやめたいと思ったが、途中おもしろくなり、結局3年間続けた。

PTA活動は、基本子どもの為にPTA活動をやっている。子どものことを想っている親。

坂本先生の母親は、人を信用できない。裏切られ続けたからだ。春竹地区の食肉センターで働いていた。友達がなかなか出来なかった。小学校4、5年生まで、地区外の人を家に招かなかった。自分は、子どもの頃身体が弱く、小学校に入るまでは入退院の繰り返し。保育園では、あまり歌など習っていないのでわからない。小学校2年生の家庭訪問の時、先生を母親の食堂に連れて行った。その時、担任の先生はハンカチを口に当てて待っている。食べ物もたくさん用意してあるのに手を付けない。帰り間際に、母親が怒っている。と、先生に向かって怒鳴りつけて、頭を殴りつける。それをなだめるのが父親の役目。

小・中学校の時の通知表はオール1。5年生の時、唯一体育が3になる。中学校でも成績が悪く、卒業後の進路相談では、就職希望。どういのが希望か聞かれても、特になし。親に相談すると、「自分の仕事を手伝え」と言われ、「仕事を継げ」と言われるものと思っていたので、意外だった。親から「この仕事はすかんど？」と聞かれ、即答で「きらい」と答えたが、今、自分が親になって思うものすごく親不孝な言葉だったと反省する。お小遣いも貰えるという事で、中学卒業と同時に手伝い始める。小さい頃から見ていたので、簡単にできると思っていたことが、実際にはとても難しかった。心の中で焦り、失敗する。数日続けたが、ある日、友達がバイクで遊びに来る。興味は無かったが、バイクを触った瞬間はまってしまった。自分でも不思議なくらい勉強して、大型の免許を受けてみる。

生まれて初めて、50 分もの間試験を受けた。発表の日に、落ちていると思っていたが、合格していた。嬉しすぎて歩きながらニヤニヤして帰った。親も信じられず、合格証書を見て喜んでくれた。

今まで、講演でいろんな人たちを見てきた。人と違う、出来ない、悪い人間というのは自分自身で決めている。そういう人は、何か一つ光るものを持っているので、安心してほしい。

人との付き合いが苦手だった母親が、人生を大きく変える出来事がある。18、19 年前、三重県にて全同教（全国人権・同和教育研究大会）があると母親が言うてくる。しつこいので母親と行くことにした。そこで、大阪の人の話に聞き入る。京都の食肉センターのおばちゃんの話があるということで、聞きに行った。母親がとても感激して、熊本に帰ってから字を覚える決意をする。小さい子どもと一緒に、57 歳の時に習い始める。字を覚えたのが自信になり、人との付き合いが増えた。人との出会いはすごく大事。人の人生を大きく変える。

それから、板前になるために大阪に行くことになる。そこで、2、3 年先輩から指導を受けながら、皿洗いの仕事から始める。失敗ばかりだけど優しくかった。何枚皿を割っても怒られなかった。後日、給料日に明細を見て、割れた皿代が引かれていた時に、社会の厳しさを知る。

大阪で3年半勤めて、熊本に帰って来て、「加茂川」に就職する。その時に奥さんと出会い、結婚する。長男が小学校1年生の時に、板前から親の仕事に変える。

奥さんと結婚した時に、2つ決めことをした。自分が子どもの時に、親とあまり遊んでいないので、子どもとたくさん遊ぶ。子どもの前では絶対に夫婦喧嘩をしないと決める。実際、35 年間していないつもりでいた。ただ、中学2年生の娘が作文で金賞をとった。「我が家の冷たい戦争」。喧嘩はしていないつもりでいたが、子どもにはばれていた。

ある日、子どもの授業参観で親の仕事の紹介があり、息子があまり自信を持ってなかった。先生が、うまく息子に父親の仕事褒めてくれた事により、息子が喜んでくれたのがとても嬉しくて、頑張ろうと思ったし、誇らしく思った。それから、初めて本気でこの仕事をもう少し頑張ろうと思った。

その後、牛のミーちゃんとお出会うことになる。工場の門で1台のトラックとすれ違う。大きな牛が乗っていた。助手席に女の子が乗っていた。小学2、3年の小さい子が降りてきた。よくある光景。女の子がバイバイするのかなあと思ったけど、バイバイもせず、牛に近づいて行った。危ないなと思った。

実は、動物たちは感がいい。牧場や農家で飼われている時はおとなしい。ただ、工場に近づくると普段はおとなしい牛たちもドアを蹴ったりするから、女の子が危ないと思った。それでも、女の子が中に入ってしまった。何も音がしないので、心配になり見に行くと、牛の首をさすっている。牛に届く訳がないと思ってみると、牛が前足と後ろ足を倒して顔の高さが同じだった。さすりながら女の子の話し声が聞こえた。よく聞いてみると、「ミーちゃん、ごめんね。ミーちゃんごめんね。ミーちゃんがお肉になってくれんと、うちのおじいちゃんお金がないの。だから、ミーちゃんお肉になってね。ミーちゃんごめんね」と何度もさすっていた。

本来、動物たちは首が急所であるため、どんなに慣れていても嫌がるけど、気持ちよさそうにしていた。その光景を見た時になんとお利口さんな牛だ。明日、この牛を肉には出来ないと思った。その時に運転してきたおじいさんが来た。明日頼むと言われたが、本当は断りたかった。あの牛は、女の子が保育園の時から懐いていてずっと世話をしていて、売らずに家で養うつもりだったが、クリスマスや正月も来るのでお年玉などお金があるので、仕方なく売ることになった。

自分には、出来ないと思い明日は休むつもりで息子にも事情を話したが、息子から、「あの牛はお父さんがするべきだ」と言われた。他の心無い人がするべきではないと言われた。

子どもとの約束は絶対守るべきだと思い、仕事には行った。ミーちゃんの所に行き、女の子のよう



に触れるかなと思い近づいたが、威嚇される。今まで、ただの肉になるものだと思っていたので、今までは可愛いとは思わず牛に触りたいと思ったこともなかった。しなくてもいいと思っていた。怖かった。ただ、今回は女の子みたいにどうしても触りたい。どこでもいい。少しでもいいから触りたかった。

それでも、牛は威嚇しているので、触れない。根気強く、手を差し伸べたら牛のほうから1歩ずつ近寄ってきて、その手を舐めてくれた。その瞬間力が抜けた。鳥肌が立った。牛たちは、匂いや触られた感覚で、この人間は大丈夫か確かめる。

もしかしたら、助けてくれる人間かなとミーちゃんは感じたと思う。何度も舐めてきた。自分の横に牛が来て、顔を舐めた。舐めたことによって安心したのか、「もー」と鳴く。怒ってないのかなあと考えた。もう一度「もー」と甘い声だった。嬉しいのかなあと感じた。初めて牛の綺麗な目を見た。生まれて初めてこんなに可愛いものだと思った。今まで、怖くて何も思わず肉にしていた。自分は何をしていたのだろうと思った。どうにかしてあげたいけど、どうにもできない。だから、牛にごめんとあやまった。天国の話をした。牛に人間の言葉がわかるはずがないのに、「もー」と返事をした様だった。次に瞬きをした瞬間、大きな涙が流れた。だから、自分の仕事は、きれいに解体することではなくて、この動物たちが痛い思いや怖い思いをしないように、少しでも楽に天国に行けるようにしてあげることが自分の仕事の意味だと思った。

私は、「いつも子どもたちをお願いをしている。あの君たちが食べている動物たちのお肉や魚や野菜は、ひとつの命だったのだよ。君たちと一緒にとお父さんお母さんがいて、話したり甘えたりしたかったけど、君たちの食事になっているのだよ。だから、沢山食べて、いっぱいお父さんお母さんに甘えること。楽しいことをすること。それが君たちにできる食べ物たちへの感謝の形だよ。」という話をすると、低学年ほどよく聞いてくれる。

それが子どもなんです。大人の理屈はいらない。理屈をつければつける程、子どもたちには伝わらない。だから、お父さんお母さんたちも本心から子どものことを想ってください。必ず伝わります。



【第2分科会】

講師：塚本 瑞天 氏（環境省九州地方環境事務所長）
演題：生物多様性～命の繋がり～



地球上の生きものは約3千万種。40億年という長い歴史の中で様々な環境に適応し進化してきた。これらの生命は一つ一つに個性があり、互いに直接・間接的に支えあって生きている。

生きものたちの豊かな個性と命のつながりを見つめながら、自然・環境・命・親子について考えます。講師は、永年環境省で国内外の環境行政に携わってこられた。野生生物・自然環境の保護・計画はもとより、世界自然遺産登録や東日本大震災の現地災害対策本部長としてもご活躍。現在は九州地方環境事務所長として地元自治体と協力して、九州地方の環境保全に尽力しておられます。

【講演内容】

I. 自己紹介 ～熊本弁にて～

生まれたつも育ったつも東京ん葛飾です。

葛飾というとしゃが、ほ、寅さんの柴又が有名かばってん、もう少し都心よりの四ツ木ちゅうところで育ちました。都立高校ば卒業してから信州大で勉強しました。昭和55年に当時の環境庁にレンジャー言うとはってん、国立公園ば管理する技術者っちゅうこっで採用されました。

最初は鳥取県にあります大山の国立公園に赴任して、次は北海道のサロベツ国立公園でがましました。その後は、霞が関勤務が続いたばってん、国際関係の仕事のたいぎゃーあつてから、ケニアのナイロビにある日本大使館に勤務したこつもあります。

自然環境の関係では、国立公園指定、自然とのふれあいの推進、野生生物保護やらに携わりました。近頃では、トキのテンにいち食われた時は、担当課長でおおごつしたばってん、小笠原の世界自然遺産登録にもがましました。

九州勤務は、鹿児島県庁勤務に続いて二度目です。熊本は、水も空気も食べ物もなんでんかんでんうまかです。自然も美しく、人も優しくて、よかところで仕事できて、良かったなと思とります。

(会場拍手)

II. 生物多様性とは何か

i. 認知度

生物多様性を知っていますか？

…35%(内閣府調査)

地球温暖化の認知度(94%)に比べて低いのですが、実は生物多様性条約も地球温暖化防止の条約と同じ20年前の地球サミットで結ばれています。なかなか問題が顕在化しないため、地球温暖化の認知度の方が高い、という状態になっています。まだ認知度が決して高くないので、私たちも努力しているところです。



ii. 生物多様性とは

①生態系の多様性

いろんな生き物がいろんな場所で生きていくこととってください。生き物は、ただ一つ、一種では生きていけません。植物や動物が一緒になって、それぞれ環境に適応して生きています。これを生態系と呼びますが、地球上各地に広がる生態系の多様性が生物多様性の一つです。

②種間の多様性

現在の種の数、175万種と計算されています。その多くは昆虫です。種の数え方は、他にもありますが、いずれにせよ多くの生き物はお互いに関係しあって生きています。

③種内の多様性

各種の中での遺伝子の違いも生物多様性の一つです。生育域の川が違えばホタルの光り方が違って、交尾ができないなどの違いが生まれたりします。人間でも顔かたちが違うなど、種の中でも違いがあります。種の中でも、いろいろな違いがあるのです。

iii. 生物多様性はなぜ重要なのか

①酸素の供給源

②気候の安定をもたらす

③有用性の源(食料・バイオミクリ・薬の原料などなど)

私たちは、これらを、対価を払う必要のないサービス、いいかえると「自然の恵み」として享受しています。この「自然の恵み」の享受の仕方は、世界中で平等というわけではなく、一人当たりのカロリーベースで計算すると、欧米や日本などがかなりの量を消費している状況です。特に日本の場合、海外輸入にかなり依存しており、偏った恩恵の受け方、使い方をしているといえます。

Ⅲ. 生物多様性はどうなっているか

i. 第6の大絶滅の時代

今現在は、第6の絶滅の時代と呼ばれています。

デボン紀やジュラ紀など、これまで第5までの大絶滅は、自然現象でした。第6は、人間の影響です。昔は1000年に1種の絶滅でした。今は176万種のうち3割が絶滅危惧種といわれています。

種ごとにダメージを回復できない段階を転換点とよび、いまは多くの種が転換点に近い状況です。

ii. 日本の今

日本には、狭い国土に多くの種がいる地域（ホットスポット）と評価されています。

その日本の生物多様性も、4つの形で危機にひんしています。

①第一の危機

人間活動によって自然が改変されてしまう直接的危機。

環境破壊が進んでいます。4分の1の種が絶滅危惧種と指定されている状況です。

②第二の危機

里山など人手が入らなくなっています。

水田などで暮らしていた種がへる、都心への集中で地方の生活環境が悪化しています。

③第三の危機

外来種の拡大。

オオクチパス、カミツキガメ、ミシシッピーアカミミガメ、アライグマなど、在来種が暮らす場所を荒らしています。

④第四の危機

地球温暖化が進んでいます。サンゴの白化が進み、魚の産卵場がへっています。

マラリアが日本にも入ってくるのではないかと懸念されています。

実際に、アメリカでは蚊が媒介する西ナイル熱の流行が報告されています。



Ⅳ. 今、私たちにできることは何なのか

愛知目標 cop10 達成にむけて、みなさんにもぜひ参加していただきたいと思います。

i. 生物多様性にふれよう

自然で遊んでみましょう。

生き物のことを分かるようになります。

自然の大切さをつたえる機会となります。

ii. 外来種はやっつける。飼えないものは飼わない、捨てない、逃がさないでください。

iii. 環境に配慮したものを買ってください。地産地消を心がけましょう。

【第3分科会】

講師：今村義彦 氏（熊本県警 生活安全企画課補佐）

演題：身を守るために～現状と予防対策～

昨今多発する凶悪犯罪。未然防止には警察だけでは限界があり、地域住民・事業者・自治体等の官民一体となった「犯罪の起きにくい環境づくり」（地域の防犯力）と、住民一人一人の「抵抗力」（自主防犯意識）の醸成が必要不可欠です。本日は、熊本県下における声かけ・付きまとい等の届け出状況や具体的事例等をもとに、防犯対策法を紹介されます。

この機会に子どもたちの「抵抗力」を育てましょう。

講師（警部）は、警察官歴 34 年のうち 17 年間を生活安全業務に従事され、現在は犯罪防止対策室において、主に子ども・女性安全対策を担当しておられます。



【講演内容】

身を守るために現状と予防対策

現在生活安全企画課で、県内の犯罪をどのように抑止していくか県内の警察署に指示し、地域の警察、一般、ボランティアの方々と交えて犯罪を抑止していこうという活動をしています。

平成 11 年頃から子ども女性に対する防犯対策を進め、声掛け、付きまとい、卑猥な言動など性犯罪を事前に予防しようと現在 11 名態勢で取り組んでいます。

県下の犯罪は 17,000 件前後で、減ってきています。多いのは自転車、オートバイ、自動車の盗難、空き巣です。犯罪予防のために自転車の二重ロックを呼びかけています。

最近増えているのが振り込め詐欺です。今年県内で 39 件発生しており、被害総額は 8600 万円です。対策としては、いったん冷静になって警察に連絡するか、振り込む前に確かめることが大事です。

熊本でも幼児がまきこまれる事件がありました。子どもを守るためには、周囲の大人の見守りと、子ども自身も声をかけられたら一歩下がって警戒をする、ということを教えていかなければなりません。

<DVD 鑑賞>

学校に不審者が侵入したとき・登下校時の不審な声掛けへ対処法をまとめた。これをもとに、事件を未然で防ぐことを期待する。

* 不審者侵入への対処法 *

侵入した不審者をいち早く発見することが大切。発見したらすぐに声を掛けてみる。犯人に気づかれないように子どもたちを安全な場所に避難させることなど、学校ごとにマニュアルを作成し、定期的に訓練をしておく。

* 声掛けへの対処法 *

- ・防犯ブザーは、すぐ使えるように体の前方につける。電池切れや故障等を確認しておく。
- ・「どこかに行こう」と言われても絶対について行かない。(知っている人でも)誰かに連れて行かれそうになったら、大声で助けを呼ぶ。友達が連れて行かれそうになっても、同じように大声で助けを呼ぶ。
- ・一人で行動しない。遊びに行くときには「どこに」「だれと」行くのかを家の人に言って出かける。
- ・子ども 110 番の家の場所を確認しておく。

子どもに対する声掛けは、県下で毎日おきています。付きまといや痴漢行為、強制わいせつなどを含めた性犯罪の前兆と見られるような声掛け事案の警察への通報は、去年は1,006件発生しています。今年は10月末現在1,080件ほど発生しており、昨年より増えています。

内容としては、公然わいせつ、携帯電話等での写真を撮る行為、一人で帰宅しているところへの声掛けなどです。声掛けについては、10/10～11/9の間で小中高校生に対して、県下で34件起きています。

一番狙われやすいのは帰宅途中です。一人でいるときが一番危ないので、警戒心を持ち、防犯ブザーを準備しておくなど、しっかりやってほしいと思います。また、子どもの親切心を利用したケースもあります。オートロックのマンションだからと安心しないで下さい。マンションでも色々な被害が出ています。

それから、危険な目にあったらすぐに助けを求めて下さい。当然のことなのですが、これができそうでできないのです。とっさに大きな声を出すのは難しいですが、防犯ブザーでしたら大きな音が出せます。実際に防犯ブザーで助かった例もあります。

また、家庭で防犯意識を高めるために、親子の会話が大切です。実際に通学路や子どもが行動するところと一緒に歩いてみて、危険な場所をチェックしておくとういいます。家族のコミュニケーションをとりながら、そのような話をしてみてもよいのではないのでしょうか。



<DVD鑑賞> 女性の被害を防ぐための対処法・自己防衛法について

女性の1人歩きや1人暮らしには、十分な警戒心と防犯の知識が必要です。暗く寂しい道を歩く・音楽を聴きながら歩く・携帯電話を使用しながら歩くという行為は、犯人にすきを与える危険な行為で80%の方が後から襲われています。

《 対処法 》

* 夜間路上を歩く時 *

できるだけ人通りが多く、明るい場所を2人以上で歩くことを心がける。時々後ろを振り返るなど、周囲を警戒すること。1人で夜間行動する場合は、誰かに迎えに来てもらう・タクシーを利用するなど自己防衛に心がける。

* 自動車から道を聞かれたとき *

自動車の前へ行き車のナンバーを確認する。ドアと距離を保ちドアの外側に立つようにする。車内の様子が見えにくい車・男性が複数乗っている車には特に注意する。

* マンションに入る時

周囲を確認してからオートロックを解除する。オートロックが開き中に入ってもドアが閉まるまで確認する。

* エレベーターに乗る時

見知らぬ男性と乗る場合は、男性の行動が見えるように壁に背を向け非常ボタンがすぐ押せる位置に立つ。後から見知らぬ男性が乗り込んで来たら、エレベーターを譲り男性が何階で降りたか確認する。非常階段など犯人が隠れやすい場所は警戒する。

* 玄関のドアを開ける時 *

鍵を開けて部屋に入る際は、十分に周囲を確認して室内にはいる。入ったら必ず鍵をかける。高層階の場合でも油断せずに必ず鍵をかける習慣を身につけ、就寝前には必ずベランダや玄関に鍵をかけるようにする。

《 自己防衛法 》

* 屋外の場合 *

- ・ 自分のかかとで犯人のつま先を踏みつける
- ・ 手に持っているバックなどで相手の顔面を叩く
- ・ 犯行を諦めさせるために、大声を出したり防犯ブザーを鳴らすなど周囲に助けを求める

* 屋内の場合 *

- ・ 周囲の人に知らせるため、近くにあるものをガラスにぶつけるなど大きな音を出して助けを求める
- ・ 壁を叩いて音を出す
- ・ 床を激しく踏み鳴らす

被害にあった女性のほとんどが全く警戒をしていなかったことから、日頃から防犯の意識を持ち被害にあわないように自己防衛に気を付けて欲しいと思います。

● インターネットの危険性について

匿名性が高く誰が使用しているのかが分かりにくいため、また広範囲に影響を及ぼすことから、犯罪に使用された場合、犯人を特定するのに時間がかかります。子どもに携帯や特にスマートフォンを持たせる場合は、必ず保護者の手でフィルタリングなどの対策をした上で持たせるようにして下さい。

また怪しいと思われるサイト・アプリなどは利用しないように心掛けて犯罪に巻き込まれないよう気を付けて下さい。

参加者アンケートより（抜粋）

【全体講演】

- とても興味深く、時間が経つのが早く感じ、まだまだ足りないように思われました。学校の価値は日ごろ感じてはいましたが、それを言葉にすると本当にその通りだとしっかりメモしました。また聞きたいと強く思いました。
- 子どもへの過保護や受け止め方を間違えないようにしたいと思う。また、学校の専門性、本人の力を育ててくれる意味で大切な場であると確認できた。
- 生きにくくなっている現代で“うまく生き合っていく力”を子どもたちが少しずつ学んでいけるようなサポートができる親の心構えを教えてくださいました。子どもへの参考というより、私本人にたになるお話をお聞きすることができました。
- 「ああ確かに」と思うことが多かったです。対人関係の経験が必要だということを改めて実感しました。昔に比べ「生きにくい」と感じていた理由の一つがはっきりして、家族にも話したいと思います。
- 分かりやすいキーワードで楽しく笑いを混ぜられた話に引き込まれました。特に、子どもに対しては「いやなこともあるよ」私たちに対しては「大木であれ」「種を蒔くように」は日々繰り返して自身に言い返そうと思います。
- 子育てについて自分が子どもに干渉しすぎてはいけないうかと考えさせられました。いろいろな人と生き合う感覚を大切だと感じました。
- わかりやすく親しみやすい語り口ながら重要なメッセージをたくさんいただいた、充実した1時間でした。
- 母性の本質というところで、子どもを安心・安定・安泰の元に置きたいと思うこととあって、さらに後方支援ともあり、自分が安心したいために困難を取り除いていたことに気づかされました。
- 具体的な事例を挙げて本当に子育てで大切なことを教えてくださいました。もっと長く聞きたい内容でした。
- ユーモアを交えて分かりやすいお話で1時間がとても短く感じました。内容的には、自分に思い当たることばかりで、耳が痛くなる思いで聞かせていただきました。今日のお話を少しずつ参考できたらと思います。
- 生活は便利になったが、便利は子どもを育てない。トラブル体験が生きる力を本人に与えること。子どもを守るとは、本人は自分で自分を守る力をつけることなど、印象に残る内容でした。
- 子どもとの向き合い方について、「ゆっくり時間をかけて」との話が印象にのこりました。また機会があれば話を聞きたいです。
- プロジェクターなどを使用して設営等があったらよかったかも。講演内容はとてもよかった。
- 話が難しいと人は寝る。今日の講演はわかりやすく、人を引き付けられる話術でとても良かったと思います。保護者の心にドキッとくるものがありました。
- 何度も聞いているが、子育てをしている私たちには、とても心に響くものだといつも感じています。もう少し時間があればもっと聞きたかったです。
- 思い当たる親の態度がたくさんあり、気づかされることばかりでした。一人でも生きていける力を育てることが大切さはわかっているつもりですが、つい目の前のことにとらわれがちになる毎日です。柳の枝ではなく、大木になれるように親として成長できたらと思いました。
- 生きる力、とても大事だと思います。私が子どもの頃と比べると心の弱い子どもが多くなったと思います。私たち親がそうしてしまったのかなあと反省しました。子どもの心が強くなれるようにサポートしていきたいと思いました。
- 子育てを行う上で、たくさんのアドバイスを受けたように感じました。子どもとのコミュニケーションを大切にしていきたいと思いました。

【第1分科会】

- 動物の命をいただき生きる。経験談や仕事のことを分かりやすくお話いただき、命の大切さを学びました。
- 人との出会いで人生は変わるものなんだと感じました。体験談を交えて話をいただき、人はやる気になればいつでも学べることが分かりました。私たちが食べている肉も食肉センターで解体の仕事をしてくださる方がいて、動物の命をいただくことにもっと感謝しなければと思いました。
- 普段、何も考えず食事をつくり、食べていることに気づき深く反省しました。胸が痛くなるほど感動するお話を聞けてよかったです。
- 命の大切さや仕事の意味を、子どもに聞かせたいと思いました。
- 食べ物（命）の大切さ、仕事の重要性を感じた。
- 命をいただくことの尊さ、大切さを忘れずに生きていきたいと思います。
- 2度目になりますが、改めて命をいただくということを考えさせられました。つい忘れがちな「いただきます」について、子どもたちと話し合いたいと思います。尊い命をいただき、生かされていることについて命を無駄にしないことを、よく考えたいと思います。
- ぜひ早いうちに学校でお話をしていただきたいです。「この肉まずい～」と言ったこともあるよねとか思いながら、命あるものをいただく感謝を大切に生活していきたいです。
- 分かっているがつい忘れがちな、命を奪って私たちは生きているという事実。改めて意識させられ、なぜか涙が止まらなくなった。現代においてはその重みはますます薄れていると思う。しっかりと子どもに伝えていこうと思った。
- 子どもたちもそうですが、大人も食について考えなければならない時期かなと思いました。

【第2分科会】

- 生物多様性について、外来種の命を絶ち日本の在来種の命を守ることの大切さはよく分かったが、同じ生き物の命、ペット（外来種）の持ち込み、飼ったら最後まで責任を持って飼うような仕組みづくりが必要。PTAの呼びかけでできそう。
- 本当に小さなことからしかできませんが、生物多様性への取り組みは結果として、地球環境への負担軽減につながるということが分かりました。
- いつも当たり前のように、身の周りにある自然に対して改めて考え直す機会を与えていただきました。自然の有り難さや、守るのも壊すのも「人」という意識を忘れずに、子どもの世代にも豊かな自然が残されていることを願いながら、小さなことから取り組みを始めてみようと思いました。
- 自分の行動が、他の生き物にどのような影響を与えてしまうかを考えることも大切なことだと思います。
- いろいろな生き物がいて、その中で生かされていることを感じました。外来生物については、人が持ち込んでいることで問題があること、子どもたちに伝えていきたいと思います。
- 子どもたちを自然に触れさせること、生き物に触れさせることとありました。親が虫が苦手なるべく避けてきましたが、これからは、生き物や植物の気持ちが分かる子どもになって欲しいので、触れる機会を与えていきたいと思う。
- 今の子どもたちは、自然の中で遊ぶことがなく、昆虫ですら触れない子どもが増えている。私たちはいろいろな生き物とともに生きている。その生物の命のお陰で生きている。そのことを子どもたちに伝えたい。
- 子どもたちに聞かせてあげたいと思いました。私たち大人にできることを、もっと皆でやっていけたらと思います。

【第3分科会】

- 事件を未然に防ぐ方法を学びました。子どもたちにもDVDを見せて認識を高め、命を守れたらと思います。
- 身近で犯罪がたくさん起きているということがよく分かりました。他人事ではないと感じました。
- 犯罪から子どもを守ることにとても難しさを感じます。今回の身を守るすべを、子どもに少しずつでも身につくよう、何回も伝えていきます。
- 危険は常にあり、回避することが難しい時があるかもしれないが、注意を欠かさないことで防止ができればと思う。
- 子どもや家族を守るために、日ごろから対策をしておくことが大切だと分かりました。
- 不審者等への対処法など、具体的な事例の説明がありとてもよい機会となった。家庭でも話をし、被害に遭わないよう、心がけをしていきたい。
- 地域の力で犯罪を減らしていく必要があると思いました。子どもの通学路を改めてチェックしたいと思います。
- 子どもたちにも、半年に1回くらい見せていただきたい。
- 「自衛」の必要性を強く感じました。事件になるようなことは自分の周りにはおこらないだろうという、心の隙がありました。日ごろからの心がけ、「もしかして」の気持ち、自分の身、自分の子どもは自分で守るという心構えが必要だと感じました。

平成24年度教養委員会

【担当 西区】

代表幹事 市P副会長 松村 晋（井芹中学校PTA会長）
教養委員長 坂口 淳（河内中学校PTA会長）
常任理事 田尻 哲也（芳野小学校PTA会長）
市P担当常任理事 前瀬 洋子（白坪小学校市P担副会長）

【教養委員会担当単P】

中央区：川原 智子（出水小）	渡邊 稔晃（西山中）	佐々木正彦（竜南中）
島崎 真（一新小）	荒平 直之（春竹小）	隈 志郎（砂取小）
東 区：高尾正二郎（健軍東小）	安部 浩敏（健軍小）	橋爪 隆記（秋津小）
有馬 省治（託麻南小）	山内 一徳（桜木東小）	
西 区：中尾 愛（城西中）	南 陽子（河内中）	大田 博喜（井芹中）
中山 恵美（高橋小）	坂西真由美（芳野小）	
南 区：加藤日登美（天明中）	橋爪 康祐（力合中）	林田 美紀（下益城城南中）
中村 久美（中緑小）	松川 知明（錢塘小）	岡田梨恵子（奥古閑小）
北村 幸子（川口小）		
北 区：田畑 正治（田原小）	小浦 慎也（龍田中）	藤岡 美鈴（鹿南中）
中村 明博（川上小）	前田 真治（田底小）	

熊本市PTA協議会事務局

☎860-0843 熊本市中央区草葉町5-1 中央公民館 2F

Tel 096-356-1122 Fax 096-351-2309

H P <http://www.kumamotocity-pta.net>

E-mail info@kumamotocity-pta.net